

大阪心のサポートセンター(フェミニストカウンセリングルーム)

ニュースレター

Green Letter

インタビュー 「近い将来に明るさを見いだして」
パーソナル・アシスタント・ギャラリーLEE'S 代表、
中小企業診断士 リー・ヤマネ・清実
『聞き書き・母の体験記』——戦中～戦後の生活模様
イン おおさか

尾上 都
我家の犬とフェミニズム その7

宮本 博文
「失ったもの」 古き良き日本に戻りたい
今日は弟とどこに行こう? 南野 早喜

VOL.68
'13 winter

OMS

大阪心のサポートセンター



パーソナル・アシスタント・ギャラリーLEE'S代表、
中小企業診断士

リー・ヤマネ・清実 さん

近い将来に明るさを見いだして

リーさんの事務所は梅田の駅から歩いてすぐの便利な所にあります。リーさんには大阪心のサポートセンターがNPO（特定非営利活動法人 心のサポート・ステーション）を立ち上げたときにお世話になりました。笑顔の素敵なリーさんにまた会えるのがうれしくて、楽しみにしていました。

【椿本】リーさんはどのような仕事をされているのですか。

【リー】わたしは中小企業診断士の資格をもっているのですが、「パーソナル・アシスタント」という自分なりの概念で仕事をしています。「パーソナル・アシスタント」というのは、経営者や起業家といった個に注目しています。どうあれ会社はトップしだいですが、外部の目と一緒に考え、実践を手助けする。大企業なら経営企画室がありますが、中小はそういう余裕もありませんし、かといって、常に将来のことは考えておかないといけないし。そう考える経営者を外部から支援してい

ます。

【椿本】例えば、どんな風にですか？

【リー】流通センターのリニューアルが課題にあがった例でいえば、トップのアシスタントプロデューサーといった感じです。全体の段取りをつけ、現状調査、同業他社の視察同行、業者との交渉、会議のセッティング、報告書業務など等、頭も使って体も動かして、実践を促進するわけです。

一方、中小企業診断士ということで、創業塾や経営セミナーの講師、アドバイザーの機会も少なくありません。

【椿本】いつごろから始められたのですか。

【リー】一九九一年に独立しました。もう二〇年も過ぎましたが、よく続いたと思います。

【椿本】その当時は珍しかったでしょうね。

【リー】当時は、「パーソナル・アシスタント？なんですか、それ」。ほとんどがそんな反応でした。多くを語らなくてもピンとくる人が多くなったのは一

九九六年頃からです。「コーディネーター」という言葉がよく使われだした時期です。専門性を有機的につなぐ役割が社会的に叫ばれ始めました。そういう背景もあって少しは「パーソナル・アシスタント」にも意味を感じてもらえるようになりました。

【椿本】どこかの事務所に勤めて経験をつんで独立されたのですか。

【リー】会社に勤めた経験はありません。

【椿本】仕事しながら、資格を取ってというパターンですか。

【リー】（笑いながら）全然、違う。会社勤めしていて、このまま最初の会社勤めをしていても一緒だなあと思ってたんです。それなりに勤めていたから、安定していました。事務をしていたのです。全体の流れを見ながら仕事をしていたので、重宝がられて、それなりのお給料ももらっていました。もしかしら、私の性格が安定をすることより、何かをしたいという性格なのかもしれない（笑う）。これでいいのかなと考えました。友人には「何が不満な

の。安定していて給料はいいのに」って言われました。でも、このままじゃ、あかんて、自分にはもつと何か能力があるのではと思いました。

【椿本】じゃあ、そのときは、何も決まっていなかったのですか。

【リー】まず、辞めて。何も考えてなかったんです。一年間、考えようって。遊ぼうと思ったんです。一九八九年、三十五歳の時です。

一月に会社を辞めたんです。そのとき、新聞に大阪YWCAのバイリンガルセクレタリーのコースが載っていた。とりあえず応募の資料を取りに行つて受験しました。そのコースは新設のコースで全日制一年制、入学の条件が社会に出た経験のある人だったんです。授業は夕方四時には終わる、私にぴったりでした。

【椿本】どういうところがぴったりだったのですか。

【リー】もともとこの一年間は「遊ぼう」と思っていたんです。いったん、職から離れて、自由な時間をつくらう

と考えていたので、人がまだ仕事をしている時間に、映画を観にいったり街を歩いたり、いいじゃないですか。

【椿本】どこへいつても、あんまり混んでいないし（笑う）。

【リー】そうそう（笑う）。

【椿本】そこからどうして、独立になったのですか。

【リー】開講したら、若いアメリカからきた男性と、ジャーナリストのニュー・ジージランドの男性が講師にいました。別々の授業ですが、初日のクラスの時、同じ質問をしたのです。「なんで、ここに来たの」と聞くわけです。クラスメートの皆は、「外資に転職するため」と答えていました。私は、「そんなつもりはない。ただ遊ぶよりは体裁がいい……」と心の中でつぶやいていましたが、説明するのが面倒なので、わたしの番にまわってきたときは「転職のつもりです」と答えました。みんなの答えを聞き終えた彼ら二人とも、これまた同じ事を言ったんですよ、「なぜ、君たちは就職することばかりを考えているんだ。

なぜ、自分でマネージメントすること
を考えないのか」って。クラスメート

のみんなも私も、「何を言ってるんです
か。独立して開業するなんて、そんな
簡単なことじゃない、日本の事情を全
然わかってない」って言ったら、返っ
てきた言葉が、「そんなことはない。簡
単さあ。電話とFAXとパソコンさえ
あれば、自宅を事務所に開業できる。

要はここだ」と言って頭を指したので
す。今でもその時の光景をよく覚えて
います。後になってクラスメートが、
「あのとき、リーさんが一番反発して
いた」と言っていました。

学校に通う間にイギリスに一カ月
ほど語学留学しました。日本人が少な
いだろうと思ってカンタベリーに行き
ました。そのときにいろんな人に会っ
たことも私にとって意味のあることだ
ったと思います。

一年過ぎて卒業して、新聞欄に液化
天然ガスを運ぶ船会社の求人募集があ
りました。条件の年齢は超えていたの
ですが、応募して受かりました。

【椿本】そういう話を聞くと元気がで
ますね。

【リー】手紙を書きました。募集の年
齢は過ぎていますが、がんばってやっ
ていきますって。後で、マネージャー
に訊いたら、「笑顔が良かった」って。
協調性があると思えたみたいです。採
用されて、外資へ転職したわけですが、
組織に属する限りは、どこへ行っても
大差ないということもわかりました。
むしろ、これまでの、日本企業の強さ
もよくわかりましたし。

【椿本】どういふことですか。

【リー】いろいろ問題点もありますが、
日本企業の集団主義は、全体の流れを
考えながら個々人が仕事をしていると
もいえます。外資は個人で評価されま
す。おのずと自分のパフォーマンス優
先になりやすい。日本の企業は個人が
押さえつけられるところはあるけれど
も、みんなががんばろうということだ
戦後の経済成長につながったのだと思
います。転職した外資はそれでもいい
会社でした。もう何年も勤務している

ような居心地の良さがありましたけど、
自分で何か新天地をひらかないといけ
ないなあという気持ちがあふつと沸
いてきてしまった。

【椿本】そこで独立を考えたのですね。

【リー】すっかり忘れていましたが、
あの二人の外国人先生の言葉が甦って
きたんです、「そうだ、自分でマネージ
メントすればいいんだ」って。結局転
職した会社は八ヶ月で辞めました。

【椿本】八ヶ月ですか。

【リー】一九九〇年の六月に入社して、
秋には辞めることを会社には伝え、翌
年一月に辞めて、三月に独立しました。
自宅を事務所にしました、自宅を事務
所に。

どんな仕事で独立するか、徹底的に
考えましたね、「要はここだ」とコメカ
ミにひとさし指をあてたあの光景を思
い出して。人とは違う自分ならではの
良さはどこにあるのか、四六時中考え
ていました。過去に重宝がられたこと
などを思い返し、あれこれ分析してい
くんですよ、自分なりに。そうこう

して一つの型が頭の中で出来上がりしました。ただ、それを人に伝えるかたちでどう表現するか、「パーソナル・アシスタント」に行き着くまで、これまた時間がかかりましたね。

【椿本】中小企業診断士はそのときには取っていたのですか。

【リー】開業独立した後です。さいわいというか、後になってみると、アダだったというか、「パーソナル・アシスタント業」として仕事を始めたことを報告がてらに以前勤めていた中小企業の会社へ挨拶に行ったら、ちょうど開発のプロジェクトで人が必要なタイミングだったようで、「ちょうどいい。外からサポートして欲しい」と顧問契約の申し出。こういうことがあるんですね。

【椿本】順調なスタートだったんですね。

【リー】そのときは気がつきませんでした。その会社の社長からすると、「パーソナル・アシスタント」はどうでもよかったわけです。職員として働

いていた時の仕事ぶりを知っているの、役、役に立つと思ったのでしよう。独立早々難なくクライアントもできて、仕事の下調べをしようと、中之島の図書館へ行った時のことです。たまたま目にした、『コンサルタントとは』というようなタイトルの本が目にとまりました。その本の最後の方にコンサルタントに関する唯一の資格が中小企業診断士だと書いてありました。中小企業診断士という資格は知っていたので、「ああ、そうか」と思って本を棚に戻したんです。

その翌日です。新聞を読んでいると、中小企業診断士の受験講座開講無料説明会が載っていたんです。前日のこともあって、何かの縁と思い、説明会へ行きました。参加者は男性ばかり。そういう世界もおもしろいかもと、とりあえず後学のつもりで三カ月のベーシックコースを受講しました。通っていると、この資格をとるために何年も通っている人がいる。一方わたしといえ

ば、単に自分の勉強のため。資格取得を目指してがんばっている人からすると、遊び半分に見えたのかもしれない。ある日、リーダー格の人が「リーさん、そんなんあかん。中小企業診断士とらんとあかん」って、怒られました。そのひと言がきっかけで、資格をとうとう勉強し始めたんです。

【椿本】良いなと思う意見は取り入れられっしやるのですね。

【リー】私というより、図書館で診断士のことが気にとまった段階から、資格取得は自然のなりゆきだったようです。

【椿本】でも、すごい馬力でやられているように思いますが。

【リー】そうですね。その当時は女性で独立してやっている人は少なかった。で、周囲の人はびっくりしていました。女性であるということ、外国人ということもあったので、事務所探しは不動産屋を通さないで、自分で見つけようと決心していましたし。

【椿本】どういうふうにされたんですか。

【リー】歩きました（笑う）。オーナービルでそのビルにオーナーが住んでいることを条件に探し歩きました。仲介を通すと、人物そのものを見てもらえませんが、私を直接見せる方法となると、自分で歩くしかありません。御堂筋を中心に右、左と歩きまわり、最初の事務所は南船場で見つけました。南船場を歩いたときに、私のイメージにぴたりしたビルがあり、空室であったのですが、管理が不動産会社の名前になっていたので通りすぎました。堺筋、四ツ橋筋と御堂筋の東西を歩きましたが、ピンとする物件はなくて、数日後、また南船場の物件に戻ってました。

思っていると、オーナーさんの方から「もし、たいへんなら保証金は少なくていいよ。ただし、出るときは元の保証金から差し引くけど」って言うてくれたんです。それと「私は日本人じゃないんですけど」と言うて、全然気にとめない感じで、「べつに関係ないよ」。トントンと話が運んでこちらが拍子抜けするほどでした。

オーナーに「どんな仕事しているの」と訊かれたので、説明すると「面白そうな仕事だね」と言うてくれました。うれしかったですね。後で訊いたら「僕だって人を見るよ」って。出会うべくして出会ったと思います（笑う）。「偶然は必然」と言うけど本当だと思います。

【椿本】外国人ということていろいろとあったと思いますが、自分で見つけてやっていこうと思われて、その通りになるのがリーさんのパワーですね。【リー】パワーといえばパワーなのかもしれませんが、自分にふさわしい方法をとっているといえるのかもしれない

せん。だから成るように為る。ただ、事務所の開設はスムーズでしたが、開所の新聞広告を出そうとした時はたいへんでした。

【椿本】何か、あったのですか。

【リー】初めて新聞広告を出すときに審査があるということは知っていました。一番、審査が厳しいのが朝日新聞なんです。朝日新聞に出せれば日経新聞はOKなんです。私は朝日新聞と日経新聞に小さな広告を出そうと思いました。代理店に電話しました。感じの良い若い女性が担当で「パーソナル・アシスタント」の仕事には、「面白いですね」と言うてくれました。日経も代理店に依頼しました。朝日の広告原稿も整い後は掲載だけという時に代理店から電話がかかってきたんです。「掲載がだめになった」って。上司の部長に電話を代わって私に説明しますが、ガンとして受け入れられませんでした。「実績がないから」。だから広告を出すんじゃないの？と私は反論するわけです。電話では埒があかないので、

事務所まで上司と担当者が来ましたが、けっして譲ることはしませんでした、できませんでした。ちよつとフェアーではありませんが、「それは私が外国人だからですか」って迫りました。部長は「そういうことではありません。ともかく、持ち帰ります」。もちろん、日経も駄目でした。愕然としましたね、本当にあの時は。事務所開設まではトントンと来たので、ここでハードルが来たんだと思いました。でも以外に冷静なんですよね、身にしむ局面の時ほど、人間って。この事態をどうしてやるかと、かつて経験したことがないほど、頭が回転しているのが自分でもわかりました。解決の手筈がどんどん思いついていくんです。よし、それでいこうと行動に移そうとした直前、先方の部長から電話が入ったんです。「審査の上に新聞各社が所属する上部の調査機関があつて、そこで取り上げてくれることになりました」。審査員の人に来て、インタビューがあり、私はいろいろと質問を受けました。好意的な感じ

で話をくれましたが、最終の報告書では「判断できない」というD(だったと思います)判定。この判定では広告を出せないんです。ただ、コメント欄に「これまでにないビジネスの概念で、広告掲載可否の判断はできないけど、本人はまっとうで、意欲もある」と書かれてあつた。このコメント部分を指示して、代理店の部長が新聞社に押しつけてくれたそうです。だから、結果的には広告を出すことができたんです。

【椿本】良かったですね。ここまでくるまでに、いろんなことがあつたのですね。

【リー】たぶん会社員として働いて同じようなことがあつたとしたら、ある程度のところで、諦めていただろうと思います。独立して自分がやろうとすることに信念があるわけですから、がんとして譲れなかつたですね。

仕事柄、創業のお手伝いをしていますが、本当に自分がよしと思う仕事でなかつたら続けられない。常に順調に事業が進むということはなく、必ず、

ハードルは訪れますから、強い思いがないと事業は続かない。

【椿本】女性が起業するときのここがポイントというのはありますか。

【リー】女性だけというのはありませんが、本当にやりたいと思うことをやるということです。今も言つたように、そうでなければハードルを乗り越えることはできません。そして、そのやりたいと思つていることを、どう世の中に届けるか。自分にとつても意味があり、人にとつても意味のあるビジネス。この両立が絶え間ない課題です。

時代が刻々と変わつていくのですから、いずれ、やつていくこと、やり方にズレが出てくる場合もあります。自分のやつていくことを深めていく、磨きをかけることが大切です。新しい知識や技能を加えて刷新していかないといけないですね。本質を変えないで進化させていく。そうしないと続かないですね。

【椿本】時代に合わせて進化させていく。本当にそうですね、いろんな意味

で変わっていつていますね。他に何かありますか。

【リー】私は一九九五年を節目に日本の社会構造は変わったとよく話しています。雇用環境にその変化が端的に現れています。能力や成果を求められる時代です。専門性や独自の能力を備えないと、それなりの職場にはありつけない。私の会社員時代は、特別な能力がなくても、正社員で採用されたし、待遇も悪くなかったですけどね。今だと、例えば、フォークリフトを扱うのでも、高層ビルを扱える技術を持つとか。

資格というのは将来を保証するものではありませんが、過去の努力に対する一定の評価にはなります。私自身は資格に意味を感じませんが、人は感じるんだということを思い知ったことがあります。

私が中小企業診断士の資格を取ったと聞きつけた会社員時代の上司が、「診断士をとったなら仕事を紹介する価値もある」と言って後継者問題で悩

む取引先に話を通してくれたのです。そういうものなんだ……と気づかされました。ともかく何らかの機会を得ることが出来る。そういう意味ではあるに越したことはないと考えています。【椿本】たしかにそういう一面はありますね。

話は変わりますが、今、日本は不況で、震災が起きて、その上に原発の問題を抱えています。仕事をされていて何か影響はありますか。

【リー】私自身は景気に左右されるような仕事の仕方をしていないし、個人事務所ですからたかが知れていますが、時流をとらえると、日本はこれからけっこういいんじゃないかと思っています。一九九五年以降十年ほどは社会の変化に皆が戸惑っていましたが、その中からコミュニティビジネスやソーシャルビジネスが出てきましたし、二〇〇五年以降、その第二世代にあたるような人たちがビジネスが出てきましたし、「失われた二十年」の学習効果がこれから出るんじゃないでしょうか。

かつての「高度経済成長」とは違う、質的な成長。もうお金は増えないけど、人のためになる、世の中のためになる、というようなことに意味を感じる人が増えていくのではないかと思います。三・一一を契機に「日本的なるもの」が再評価されるようにも思います。二〇一五年から二〇二五年にかけて日本は第二の成長を実現するのではないのでしょうか。

【椿本】海外でも暴動が起きない日本は賞賛されましたね。最近はおもてなしの心というのが脚光を浴びています。日本だと当たり前のことが評価されています。

【リー】二〇二〇年に東京オリンピックの話がでていますね。もし、誘致が決まったら「第二の成長」がホンマモノになるんじゃないかとふんでいます。日本の政治は劣化していると言われています。でも、市民は進化していると思いますよ。

【椿本】国民の一人一人の意識が高くなるということですか。

【リー】というか、アテにできないということでしょうね。アテにして待っていたら、窮地に追い込まれる。自分たちで力を合わせて先に動きだそう、ということだと思っています。それに政治がついていく。ネットが個の連帯をグローバルにしていますし、暮らしや仕事に対する考え方や働き方も変わってきました。今後十五年ほどの間に一九九五年以降の社会変化の一つの形が整うのではないかと思います。

【椿本】ノマドというパソコンと携帯だけで仕事をする、事務所を持たない働き方をする人もでてきていますね。

【リー】ソーシャルメディアで共感できる人に出会える時代になってきました。たくさんお金儲けはできないけれど、やりがいがあると思いつながらギスギスしないで自分らしく生きたいですね。

【椿本】暗い話が多い中、話を聞いて元気になりました。お忙しい中、今日は時間をとっていただきありがとうございます。

.....
会員になりませんか?
.....

会員になると

お申し込みは

大阪心のサポートセンター

電話 06-6944-8345

○年4回、ニュースレターをお送りします。

○催し物のご案内をします。

○催し物の維持費免除と参加優先権があります。

○年1回、会員の懇親会を開催。参加費が無料になります。

年会費 2,000円

会費のお振り込み先(お名前やご住所のご記入をお忘れなく)

郵便口座番号 00960-8-38298 加入者名 大阪心のサポートセンター

特定非営利活動法人

心のサポート・ステーション無料電話相談

女性のための

心のつながりライン

電話番号 06-6944-2280

毎週月曜日の午前10時から午後5時と土曜日の午後1時から5時

(※土曜は午後のみ、祝・祭日および振り替え休日は休み)